



Title	<書評>「西洋服装史」 村上憲司著 創元社 昭和42年5月20日発行
Author(s)	元井, 能
Citation	デザイン理論. 1967, 6, p. 112-114
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52502">https://doi.org/10.18910/52502</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

「西洋服装史」

村上憲司著

創元社

昭和42年5月20日発行

服装の歴史や被服の歴史についての書物は、日本のものをのぞけば、それがたとえ、世界服装史という名になっていようと、西洋、あるいはヨーロッパを主として内容としたものがすべてである。服装史といえば、西洋服装史のことを指すほどである。それはなぜか？ それほどに西洋において、服装史の研究は盛んであり、多くの書物が出版されてきているからである。そして、日本では、西洋でつくられた服装史の書物の定本というべきものを翻案したものを組立てれば、西洋服装史は容易にでき上るものもある。日本で出版された西洋服装史の多くがこのような内容を思わせるものであった。

しかるに、村上氏の「西洋服装史」においては、彼独自の研究の集積としての結果と見受けられる。新たな組立ての上に仕上げられたこの書物への努力は読む人に伝わることであろう。新しい角度からの、そして翻案的な過去の類書からの脱出はこの書物の価値といえよう。

本文は6章に分けられている。各章はそれぞれ2乃至5節に細分されている。各章と各節についてのこの分割法は適当のように見受けられるが、少し疑問も感じられるので、この点についてはあとでのべる。

集録されている写真や図版の多いことは、被服の歴史が言葉だけでいくら語られても解りにくい点を十分に補ってくれる意味からありがたい。それは336の番号で終っているが一つの番号にa, b, cとあるものもあるからそれ以上の数

といえよう。

内容的には、どちらかといえば、近世以降に重点がおかかれているようであり、とくに、近代、現代について、この書物の特色が發揮されているようである。著者自身のいう「生きた自然風土や生活環境、現代の政治・社会・経済の仕組み、時代の精神とその反映である生活のマナー、男女の生態、流行気質、さらには諸芸術との関係などをもふくめて、人間の生活文化のすべてを考察の対象として」、著者自身が長年蒐集した資料をもとにのべられている点は興味深い。

ところで、以上の労作への讃辞を否定する意味でなく、むしろ、私見としての疑問をのべれば、第4章、近世の服装、その2、ルイ王朝時代の服装、の第1節の「ルイ13世時代前後の服装」の本文中に「バロック」という言葉が見えるが、これは、第3章、近世の服装、その1、にルネサンス時代の服装、とあるからには、バロックという言葉をなぜ章の見出しに出さなかったのかわからない。同じことがロココについてもいえよう。このことと関連して、近世以後の節の表題が、第5章の第4節まで、フランスの歴史区分を用いている。第4章はルイ王朝時代の服装であるからルイ13世からルイ16世までを表題にすることは了解されるが、つづいて第5章も、フランス革命、ナポレオンの時代、王政復古からルイ・フィリップの時代、というのは、あまり好ましい区分といえないだろう。

内容的に見て、少し気になることは、これもまた、とくに、近世以降のところで、服装史であるはずが、どちらかといえば、服装の流行があまりにも表面にすぎていないだろうか。服装の歴史は、その時代の人びとの服装の歴史であって、決して、流行現象だけの変遷におわるものではない。モードやファッションやニュー・ルックだけで服装史がひもとかれるものでない。それらと一般庶民の服装との間には距離があるのではないか。とはいへ、このことは、言うは易く、行うはかたしであろう。この点から、労作を批評するのは酷にすぎるかも知れない。一般庶民、ことに下層の人たちは服装に全く関心がない、とは

いえず、やはり、この点をも考察の対象にすべきであろうし、著者の今後の資料蒐集によって、さらに、みのり豊かな服装史をねがうものである。

小さな点をあげると、普通に用いられ、了解されていることかも知れないが、「プレーンな」「フィリジア」「ブラウジング」「フラットカラー」「ダンディ」「アンドロマヌ型」「クーチュール」などについては説明がほしかったり、無理にカナ文字を用いず、日本語でもよいのではないかと思われる文字が目立ったように思える。モホリ・ナギの言い方を借りれば、言葉の世界においても、やはり、「秘密結社の暗号」のような専門語を出来るかぎり、平易な言葉にした方がよりよく、より多く読まれるのではなかろうか。

京都市立美術大学

元 井 能